

【表1 - 2 琵琶湖の現代のすがた】

項目	規模等	備考
湖面積	約674km ²	滋賀県面積の約6分の1
湖岸線	約235km	東海道線の大津～浜松間とほぼ同距離
長軸	63.49km	西浅井町塩津～大津市玉野浦
最大幅	22.80km	長浜市下坂浜～高島市新旭町饗庭
最小幅	1.35km	守山市水保町～大津市今堅田(現在の琵琶湖大橋)
最大水深	103.58m	安曇川河口沖
平均深度	41m	北湖43m、南湖4m
貯水量	275億m ³	京阪神地区1,400万人の約15年間の水道用水に相当
流域面積	3,848km ²	淀川流域面積(8,240km ²)の約47%に相当
水面標高	(O.P.B.+85.614m) =(T.P.+84.371m)	琵琶湖基準水位 = B.S.L. 琵琶湖水位 ± 0m = B.S.L. ± 0m = O.P.B.+85.614m
年間平均流入水量	50億m ³	1875年(明治8年)～1996年(平成8年)の122年間平均
年間平均雨量	1,900mm	1894年(明治27年)～1996年(平成8年)の103年間平均
流入河川	121河川	一級河川の数

琵琶湖総合開発協議会「琵琶湖総合開発事業25年のあゆみ」より作成

(3) 自然環境

琵琶湖周辺は、古くから近江八景に代表されるように風光明媚なところであり、わが国で最初に国定公園に指定されている。平成12年には、滋賀県により「マザーレイク21計画」が策定され、基本方針の一つとして自然的環境・景観保全を挙げ、ビオトープネットワーク拠点の確保対策等が行われている。

また、琵琶湖・淀川水系は、日本の淡水魚類の宝庫と言われている。これは日本最大の淡水湖である琵琶湖を源流とすることや水系全体の生成の歴史が古いこと、さらに気候・風土が温帯魚類の生息に適していることなどによる。

琵琶湖にすむ生物はおよそ1,000種類にも達し、琵琶湖・淀川の固有種は、水草、植物プランクトン、動物プランクトン、水生昆虫、貝類、魚類など約50種類と多い。

このような豊かな生物資源を持つ琵琶湖において、動植物の生息環境を保全し、水産資源の再生産を確保することは非常に重要である。そのため、ヨシ群落は、自然環境の保全、湖岸の浸食の防止、琵琶湖の環境保全にとって大きな役割を果たしている。淀川にも鶴殿のヨシ原と呼ばれる面積75haの広大なヨシ群落がある。しかしながら現在は、陸地に生育する植物が進入しヨシ原の面積を減少させている。

また、淀川の河岸にはおよそ440種類にのぼる植物が見られる他、桂川沿いにある保津峡や嵯峨野の嵐山、宇治川にある塔ノ島など、上流部の優れた景観は有名な観光地となっている。



【琵琶湖(南湖)】